

女の戦いは



女たちもまた熱い戦いの中にいた。
これまで年男だけに許されていた騎手の務めを、初めて任された2人の大和撫子。気合いを入れて結び上げた艶のある髪に、紅白の鉢巻さが華を添える。
彼女たちが緊張した面持ちで騎馬にまたがると、ベテランが顔をそろえた騎馬が、それを振り払うように力強く立ち上がった。

熱く激しく



華やかに

女に乗せた騎馬は、湯が飛び交う戦場を軽やかに駆けまわり、かき乱す。

襲い掛かる湯をひらりとかわし、騎馬はさらにスピードを上げた。

空を切った湯は、戦場を取り囲む観客たちへと降り注ぐ。

思いのままに戦場を駆け抜けた両騎手が対峙すると、今までの分を取り戻さんとするかのように、四方から湯の嵐が吹き荒れる。

湯のあまりの勢いに2人の騎手は両手で顔を覆い、動きが取れなくなっていた。

このまま終わってしまうのか。誰もが思ったそのとき。

「がんばれ！ 鉢巻きを取れ！」

観客の声援が響いた。

ほかの観客も次々に声を上げる。

その声援に背中を押されるように、2人の手がゆっくりと相手に伸びた。

手と手が触れ、ついに勝負が始まる。

紅組の騎手が騎馬から身を乗り出し、体ごと鉢巻きを取りに行く。白組の騎手もずり落ちる鉢巻きを押さえながら、負けじともう片方の手を伸ばした。

ベテランの騎馬は、飛びかかる湯にも微動だにせず、目を見開いて戦いの行方を見守っている。

そしてついに、白い鉢巻きが、紅組の騎手の手に絡んで落ちた。

戦場に、高らかな声が響いた。

「男は白が勝ち、女は紅が勝った！ 湯量も増えて温度も上がる！ 今年も登別温泉は安泰だあああああ！」

こうして、熱い戦いは幕を閉じた。